

はしがき

本書は、私が過去35年間の勉強と研究を通して身につけた、医療経済・政策学、広くは社会科学の視点と方法、技法を集大成したもので、「講座 医療経済・政策学」の「関連書」でもあります。全体は、第1部医療経済学の視点と研究方法（第1～3章）、第2部私の研究の視点と方法（第4・5章）の2部・5章構成となっています。

第1章医療経済・政策学の特徴と学習方法は本書全体の導入です。まず私の医療経済学の理解について述べ、特に医療経済学には「国籍」があり、アメリカで主流となっている新古典派医療経済学は日本医療の分析には無力なことを示します。次いで、主として若い研究者のために、医療経済・政策学の幅広く偏りのない勉強をするためには、何が必要かを述べます。コラムでは、英語と日本語で書かれた主な医療経済学の教科書、私が毎号チェックしている医療経済・政策学関連の英語雑誌等を紹介します。

第2章では、私の医療政策の将来予測の視点と方法を紹介します。医療経済・政策学の他の研究者にみられない私の特徴の1つは、現状分析だけでなく、将来予測にも挑戦し続けていることです。本章では、まず、医療経済学の視点からの医療政策の「客観的」将来予測の有効性を指摘した上で、私の行っている3つの研究・調査に基づいた「客観的」将来予測の枠組みを示します。さらに、政府・厚生労働省の公式文書や閣議決定、政府高官や政策担当者の講演録等の読み方のノウハウを紹介します。最後に、私の過去の将来予測の誤りの原因を分類・検討します。

第3章は、私が2000年以来、21世紀初頭の医療政策の分析枠組として提唱している「3つのシナリオ」説の最新版です。ここでは3つのシナリオ（新自由主義的改革、医療保障制度の部分的公私2階建て化、公的医療費の総枠拡大）の概略を紹介した上で、この分析枠組みの留意点を指摘します。その後、小泉政権が5年前に閣議決定した2001年「骨太の方針」中の新自由主義的医療改革の帰結を検討し、その全面実施がない経済的・政治的理由を明らかにします。最後によりよい医療制度をめざした私の改革提案を示します。本章には8つの注を付け、今まで「3つのシナリオ」説について出された様々な質問や疑問等に答えました。

第4章では、リハビリテーション医学研究から医療経済・政策学研究へ進んだ、私の35年間の勉強と研究のプロセスをふり振り返りながら、私の研究の視点と方法について出来る限り具体的に述べます。まず私の職業歴と研究歴を、東京都心の地域病院（代々木病院）での臨床医時代の13年間と日本福祉大学教授になってからの22年間に分けて紹介します。前者では、「修業時代」の5つのキーワードまたは教訓も示します。次に、私の研究の3つの心構え・スタンスと福祉関係者・若手研究者へ忠告を行った上で、私の研究領域と研究方法の特徴について述べます。前者は医師としての「比較優位」を生かして、主として医療提供制度の研究を行うこと、後者は、日本医療についての神話・通説の誤りを実証研究に基づいて明らかにすることです。後者には2つの手法があり、1つは官庁統計の独自の分析、もう1つは独自の全国調査を行うことです。ここでは、保健・医療・福祉複合体の

全国調査を中心とする私の「3大実証研究」の概略も紹介し、それらが成功した3つの理由を述べます。合わせて医療経済・政策学の実証研究のみでは政策の妥当性は判断できず、価値判断の明示が必要なことを強調します。最後に（社会人）大学院入学のすすめを行います。

第5章では、研究方法の一環あるいは基礎となる資料整理の個々の技法について、私の流儀を紹介します。それらは、論文の整理の技法、本の整理の技法、新聞・雑誌と本の入手とチェックの技法、インターネットを利用した情報検索、「読書メモ」と「読書ノート」の技法、研究関連の手紙整理の技法、年賀状の2つの工夫等です。ここで私が一番強調したいことは、資料整理・記録と記憶が相補的なことです。さらに本章では、資料整理と密接に関連する、能率手帳小型判とB6判カードを用いた自己管理の技法、さらに私が資料整理の技法に興味を持った動機、私の研究者兼教育者としてのプロ意識と美学についても述べ、最後に資料整理が苦手な社会人や若い研究者へのアドバイスをを行います。コラムでは、私の英語勉強法、私が社会科学研究者の必読雑誌と考えているThe Economistチェックの手順等について紹介します。

付録の「大学院『入院』生のための論文の書き方・研究方法論等の私的推薦図書」は、私が、毎年、日本福祉大学大学院の入学式・オリエンテーションで新入生全員と全教員に「おみやげ」として配布しているものの最新版で、7分野、合計172冊の図書を簡単なコメント付きで紹介しています。私の知る限り、これはこの分野でもっとも包括的な文献リストです。

私が本書に込めた願いは、読者が、本書を通して、医療経済・政策学に限らず、社会福祉学、社会学等の社会科学の勉強と研究の意義と面白さ、および厳しさを理解し、自分なりの研究の視点と方法、技法を身につけるヒントを得ることです。なお、第1部と第2部は内容的には独立しており、興味のある方から先に読み始めていただいて結構です。

2006年10月10日

二木 立

あとがき

本書の出版を最初に企画したのは3年前の2003年9月であり、前著『医療改革と病院』（勁草書房、2004年4月出版）の原稿をまとめるよりだいぶ前でした。

その直接のきっかけは、2003年8月に「中日新聞」記者の安藤明夫さん（現・名古屋本社生活部次長）から「資料整理の哲学」について長時間のインタビューを受けたこと（同紙2003年9月9日朝刊の文化面「この人に聞く」欄に掲載）。私は、以前から、資料整理法に限らず、社会人になってからの勉強と研究を通して身につけた研究方法と技法（広くは知的生産の技術）をまとめたいと思っていました。そのために、持ち前の凝り性もあり、安藤さんから事前にいただいた詳細な質問事項に対する膨大な「文書回答」（400字×約80枚）を徹夜で一気に執筆しました。さらにインタビュー前後にそれを私の勤務先の日本福祉大学の若手教員や大学院生に見せて意見を聞きながら大幅に加筆し、「資料整理の技法と哲学」と題して、『月刊／保険診療』2003年11月号から2004年3月号に長期連載しました。これが本書第5章の元原稿になりました。

これに先だってインタビューの「文書回答」を勁草書房編集部の橋本晶子さんにもお見せしたところ、大変興味を持っていただき、これを中核にして、社会科学研究の方法と技法についての本を出版することを提案されました。これは私にとって願ってもないことで、さっそく2003年9月には『私の研究方法と哲学－医療経済・政策分野を中心に』の企画書を作成し、翌2004年3月に出版する計画を立てました。その後この本を、当時、私も編集代表として出版準備に関わっていた『講座 医療経済・政策学』の「参考図書」と位置づけることになり、書名も『医療経済・政策学の方法と哲学』に変更しました（最終的には、『医療経済・政策学の視点と研究方法』に再変更。「哲学」を用いない理由は第4章参照）。

しかし、前著『医療改革と病院』を2004年4月に出版して後は、大学の管理業務（社会福祉学部長と文部科学省21世紀COEプログラムの日本福祉大学拠点リーダー）に精神的に追われたためもあり、個人研究面では虚脱状態あるいはスランプに陥り、原稿準備はなかなか進みませんでした。しかし、それでもその後の2年間、本のテーマに関連して行ったいくつかの講演・報告を本書の元論文として少しずつ原稿化することにより、なんとか一書にまとめることができました。それらの講演・報告は、日本福祉大学公開夏季大学院での講演（2005年7月。本書第4章）、医療科学研究所での報告（2006年4月。同第1章）、韓国・延世大学での報告（2006年5月。同第3章）です。ただし、いずれの原稿も講演のテープ起こしではなく、完全な書き下ろしです。しかも本書収録にあたって元論文に大幅に加筆補正し、単なる論文集ではなく、一書としてのまとまりを持つようにしました。また文体は、第3章を除いて、あえて「ですます調」で表記し、しかも各章（特に私の「自分史」も含んだ第4・5章）はすべて実名を書くようにしました（もちろん私信については公開の許可を得ています）。それにより、本書の内容に少しでも臨場感があればと考えたからです。

さらに私にとっては初めての試みとして、各章の補足として、合計10のコラムを付けました。これらは、私が2005年1月から友人・知人にBCCで配信しているメールマガジン（「二本木の医療経済・政策学関連ニューズレター」）に掲載したもの、または日本福祉大学の

学部・大学院の講義や演習で配布している資料です。これによっても、本書の臨場感が増したと思っています。

なお、この「ニューズレター」は、①雑誌発表論文（『文化連情報』「二木教授の医療時評」欄等に掲載した最新論文）、②医療経済・政策学関連の最新の洋書や英語論文の紹介・抄訳、③私の好きな名言・警句の紹介の3本柱で、毎月1日に配信しています。これのすべてのバックナンバーは、いのちとくらし非営利・協同研究所のホームページ（<http://www.inhcc.org/jp/research/news/niki/>）上に転載されていますので、お読み下さい。これの配信は少なくとも、日本福祉大学の定年（65歳）まであと6年間は継続しようと思っています。

本書をまとめることにより、私の35年間の勉強と研究のプロセスと到達点をじっくり振り返ることができました。それにより、3つのことに気づきました。第1に、私の修業時代に川上武先生と上田敏先生からいかに多くの教えを受けたかを再確認しました。第2に、私の勤務先の日本福祉大学の研究環境が、人的面でも、物的面（特に附属図書館）でも、非常に恵まれていることに気づきました。第3に、今までぼんやりと感じていた私の研究者としての強み・特徴と弱みをはっきりと自覚しました。

私の研究者としての強み・特徴は、はしがきにも書いたように、日本医療についての神話・通説の誤りを実証研究に基づいて明らかにしてきたこと、および日本医療の現状分析だけでなく将来予測にも挑戦し続けていることだと思います（詳しくはそれぞれ第4、2章参照）。

逆に、弱みは以下の3つだと気づきました。①私は徹底した個人主義者（ただし社会連帯は大事にする）なためもあり、他の研究者との共同研究（特に大規模な共同研究）がほとんどできないこと。②1992～1993年のアメリカ留学以降は、英語での研究発表（国際学会での発表やレフリー付き学術雑誌への投稿等）はほとんどできていないこと。③臨床医を辞めて日本福祉大学教員になった直後の1985年に出版した『医療経済学』（医学書院）で、「医療経済学の2つの現代的課題」と自己に課した「医療技術の経済学的評価」（臨床経済学的研究）と「ミクロレベルの改革モデルづくり」に、この10年間まったく手をつけられなかったこと。実はこの課題には、1995年に出版した『日本の医療費』（医学書院）で少し挑戦したのですが、その後は、医療政策研究（介護保険論争を含む）と保健・医療・福祉複合体の実証研究に傾斜したため、まったく手をつけられていません。

ただし、私に残された時間を考えると、今後、これらの弱点を矯正するよりは、私の強み・特徴を生かした研究を進めるほうが効率的だとも思っています。「短所を直す努力をするよりも、同じ努力をするなら長所を伸ばせ。同じ努力をするなら、いっそう長所を伸ばして、それによって短所をカバーする方が効率が良い」（松下幸之助。立石泰則『復讐する神話』文藝春秋,1988,106-107頁より重引）。

具体的には、『医療改革と病院』のあとがきで「今後の研究予定」と書きながらその後まったく進んでいない、新たな視点からの保健・医療・福祉複合体の実証研究を2007年には必ず始めたいと思っています。それが終わったら、『日本の医療費』以来の宿題となっている「技術進歩と人口高齢化、医療費抑制政策とのトライアングル（三角関係）の実証的・理論的研究」に挑戦したいと思っています。

最後に、本書の生みの親となった安藤明夫さん、私の2人の恩師である川上武先生と上田敏先生、第2部の2つの元原稿に率直なコメントをいただいた日本福祉大学内外の多くの教員・大学院生、および原稿の完成が大幅に遅れたにもかかわらず超特急で出版作業をしていただいた勁草書房編集部の橋本品子さんに感謝します。

2006年10月10日

二木 立